

市場統合と社会統合

富沢賢治

聖学院大学大学院

世界は市場原理によって経済的には統合されつつあるが、その半面で人々の社会的な生活が多く面で分断され、格差社会と呼ばれる社会が生まれつつある。経済的な統合は進展しているが、人びとの社会的な統合が後退している。

市場統合と社会統合の両立は可能か。可能であるとすれば、いかにして実現させるか。この問題は、別言すれば、市場原理が追求する効率性と、その一方で疎外されがちな社会性とをいかに両立させるかという問題である。この問題にアプローチするためには、単に経済学と社会学だけでなく、さらに政治学の観点、原理的には公平性の観点が必要とされる。市場原理を基礎としながらも効率性・社会性・公平性の鼎立を可能とする社会をいかに実現させるか。これが、現代の社会科学者が解くべき基本的問題となっている。

このような問題を発生させる背景には、とりわけつぎの3つの時代状況がある。

第一は、グローバリゼーションとローカライゼーションの同時進行（グローカリゼーション）である。グローバリゼーションというコインを裏返せば、そこにはローカライゼーション（地域化）という現象が見られる。グローバリゼーションが進めば進むほど、国家間を隔てる壁は低くなり、地域社会という生活の単位が表面化し、地域における生活問題が表面化する。そして、これらの生活問題の解決を目指して活動する民間非営利組織が多くで国で急増している。

第二は、「官から民へ」という時代動向である。「官から民へ」という動向において重視すべき点は、単に「非効率な官業から効率的な民営へ」という効率性の視点だけではなく、「官が担っていた公共的な事業の民営化」という、事業の公共性の視点である。このような時代状況のなかで、公共的な事業を営む民間非営利組織の役割が、明確化しつつある。

第三は、市場統合の国際的進展と、そのもとでの伝統的共同体の衰退である。伝統的共同体の衰退は、いわば歴史的必然性をもって進行しているが、問題は、新しいかたちでの共同体が未成熟だという点に見られる。新しいかたちでの共同体の未成熟は、直接的な人間関係の希薄化、児童の社会化の遅れ、人間性の危機などの社会問題と連動している。新しいかたちでの共同体の構築が、21世紀社会

の基本的な課題となる。

人類史的な観点から世紀単位で根本的な社会問題を挙げるとすれば、19世紀は伝統的共同体の衰退、20世紀は地球環境の危機、21世紀は人間性の危機だと言える。

19世紀には、市場経済の世界的進展につれて、伝統的共同体が各地で衰退していった。産業の主役が農業から工業やサービス業に移行するにつれて、村は都市へと変貌していった。共同体の特徴は、人びとの結びつきである。共同体の衰退は、人びとの結びつきの衰退を意味する。

20世紀、市場経済の進展は、地球的規模で伝統的共同体を崩壊させるだけでなく、自然の再生そのものを危機に追いこみ、地球環境の危機を生み出した。

人間は社会環境と自然環境のなかで生活している。共同体の衰退と自然環境の危機が人間の本性に影響を及ぼさないわけがない。21世紀の人間は、自然（nature）と人間性（human nature）の破壊という二重苦に苦しめられている。

21世紀になってまだ数年であるが、この間の社会変化のスピードはすさまじい。変化の主要要因は、市場経済のグローバリゼーションである。20世紀末に社会主義諸国が衰退あるいは崩壊した後、市場経済が地球の全面を覆いつつある。それに伴って、伝統的共同体の崩壊期に比べていっそう進んだかたちでのコミュニティの衰退が、各地で進行している。

19世紀の伝統的共同体の衰退期においては、人びとの結びつき（コミュニティ）の核心をなす家族内の人間関係、相互扶助関係は、伝統的共同体の歴史的遺制の影響もあって、依然としてかなり密接であった。しかしながら、21世紀においては、地域コミュニティの核をなす家族コミュニティそのものの揺らぎとそれに伴う人間性の危機的現象が生じている。

以上を総括しよう。①現代社会の根本問題は、伝統的な共同体が崩壊したにもかかわらず、新しい共同体がいまだ成立していないということである。②21世紀の社会科学の基本的課題は、現代社会の諸条件のもとで新しいかたちの共同体をいかに成立させるか、その道筋を明らかにすることである。この研究をすすめるうえで、ワーカーズコープの運動が豊富な素材を研究者に提供している。